優秀賞

「続ける」ということ

茨城県立古河中等教育学校　一年
石井香帆

「三十八」

この数字は、私が続けていることを表したものです。なんだと思いますか。これは私が小学一年生のころから現在も続けている「日記」の冊数です。

毎日書くと決めたことなのに、小学五年生のころには、さぼってしまう日もあり、母に、「今まで続けてきたのだから、毎日書きなさい」と叱られたこともあります。たった一ページなのになかなか続けることが出来ず、何日かためてしまうこともありました。「続ける」ことは本当に大変なことだと思いました。書かなければと分かっていても、自分に甘く「やめてしまいたい」と思うことが多かったです。しかし、やめてしまったら、今まで続けてきたことが無駄になってしまう…、そう思うと「やめたい」という気持ちと「続けなければ…」という葛藤が私の心の中に生まれました。

そんなとき、毎週通っている図書館で一冊の本に出会いました。「スポーツが教えてくれたこと、夢に向かって泳ぎきれ」という本です。ある日、この本を偶然手にしました。私は、「スポーツは何を教えてくれるのだろうか」そんな思いで読み始めました。

そこには、水泳「入江陵介」選手のオリンピック出場までの夢に向かって努力したことが書かれてありました。大切なのは「努力と継続」。継続することは大変なことだけれど、それを積み重ねていくことが自分の成長につながることをその本から学びました。それからは、なるべくためずに毎日書くように心がけ、最近では、約二百字を何分で

書けるか、時間を計り、目標を設定して書くようにもしています。

「続ける」といえば、私の兄は中学校三年間、一日も休まず部活動をやり遂げました。兄は卓球部のレギュラー選手として努力し、最後の総合体育大会では仲間と共に県大会まで勝ち進みました。私はその試合を母と見に行きました。

試合が終わると母は、どこか寂しそうに、でも誇らしげに、

「お兄ちゃんもいよいよ引退だね。入学してから、雨の日も夏の暑い日も雪の日も自転車で練習に行ったっけ。一度も車で送迎したことはなかったよ。しかも休んだり、さぼったりしたことも一度もなかった。部活動皆勤賞。練習に一生懸命取り組んで最後までやりきった、頑張ったお兄ちゃんは立派だね。そしてなによりたくさんのいい仲間ができた。」

と話してくれました。試合を終えた兄の目には涙があふれ、一人タオルを目に当てて泣いているのが二階の応援席からもわかりました。兄の最後の試合を見て、私は兄をとても尊敬しました。そして、私も頑張って続けてみようという強い気持をもつことができました。私も中学生になったら、自分の意志で部活動を選び、三年間続けよう、やり遂げようと強く思った出来事でした。

現在、中学生となった私は「陸上競技部」に入部し、先日は六年次である高校生の先輩方の引退式が行われました。そこには、六年間一生懸命、部活動を続けてきて輝いている先輩方の姿がありました。

出会った本や私の兄、陸上競技部の先輩たちが「続けることとは…」と私に問いかけているようで、続けた先にあるものを考えさせてくれました。

小さな目標を立て、コツコツと努力し、いつか大きな目標を達成させる力は「継続」にあるのではないかと思います。

私にはまだ「夢」という明確な目標はないけれど、まずは目の前にある小さな目標に向かって、一歩一歩進んでいけるような人になりたい。そしてどんな小さなことでも何か一つ、胸を張って「できた」と言えることを見つけたい。「継続する力」を身につけ、小さな努力や続けてきたことが、いつか自分の大きな自信となりますようにと願い、これからも「三十八冊目」の日記に新たな一ページを書き加えていきたいと思います。

みなさんもぜひ、何か続けてみませんか。